

## 専修学校等の部 最優秀賞

### 学べる喜び

青山製図専門学校 CAD設計製図科 二年

小林 祐斗

私は青山製図専門学校に通う以前、リフォーム会社に勤めていました。入社当初は仕事内容が全く理解できず、いつも思い悩んでばかりいました。

しかし、次第に仕事にも慣れはじめ、元請先の方に私の発案したプロジェクト案が認められた時には、今まで諦めずに粘り強くやって良かったと心から感じました。担当していた業務は大半一人で行動することが多かったため、会社内の上司や仲間と連携を図りながら、社員同士の信頼関係を築いてきました。妥協せず、粘り強く最後までやり抜く力と強い精神力を身に付け、それと共に仲間の大切さも実感しました。

入社し二年経ったある日、会社でCADを操作している光景を目にし、実際に触れてみると、みるみるうちに虜になっていました。その時の会社の上司に「CADを本気で勉強したいなら、学校に行くことを勧めるよ。」と言われ、初めは冗談半分で聞き流していたのですが、ある日CADを学べる学校を調べていると、CADにも沢山の種類・ソフトがあり、CADの奥深さを実感しました。そして私なりに考えた結果、勤めていた会社を退社し、それと同時に青山製図専門学校のCAD設計製図科への進学を決めました。

しかし、学費は安いとは言えず、両親にも大変迷惑をかけたしまいました。私の貯金額ではとても賄える額ではなかったため、両親にお金を借りてなんとか入学を認めてもらったのです。その時に私の父親は「学校へ行きたいなら行け。ただ、中途半端は絶対許さないからな。お金の面は心配するな。おれがちよっと酒を控えればいい。」と言ってくれました。今でも忘れられない言葉です。うちの家庭は裕福とは言えず、経済的にも厳しい家庭でした。それなのにこのような言葉をかけてくれて、私はとても嬉しく、一心不乱に勉強に打ち込むことを強く決心しました。

入学してみると、勉強から遠ざかっていたためか、とてもペンが重く感じられ、ノートを取るのにも一苦労でした。私は高校生まで勉強が大嫌いで成績も悪く、専門学校の授業についていけないのかという不安な気持ちもありました。

ところが会社を辞めてまで進学を決意した気持ちは大きく、勉強に対するモチベーションの高さに自分自身驚きでした。授業で学ぶことがスラスラ頭の中に入っていくのが分かりました。テストでの結果も良く、今までの学生生活では考えられないくらい、私自身の成長に両親までも驚いていました。共に学んでいるクラスの皆は私より年下なのに、自分なりのビジョンがしっかりとできていて、勉強に対する意識も高く、仲間にも恵まれ、良い環境の中で楽しく勉強しています。

私が所属しているCAD設計製図科は、建築CADと機械CADの両方を学べ、就職率も高く、将来は幅広い分野で活躍することができそうです。

しかしその分課題が多く、常に提出期限に追われる日々で

す。先生方の教え方も上手くユーモア溢れる方々ばかりで、毎日楽しく授業を受けさせてもらっています。一年次の集大成となる青山制作展に向けての作品作りでは、毎日『三時間睡眠』と、かなりハードでしたが、完成し終えたときの達成感は最高に心地よく、今でも忘れられません。

二年生になり就職活動が始まり、私は機械分野を希望していました。学校の求人票やインターネットで色々企業を調べ、結果、機械設計の会社に内定が決まりました。その会社は事業内容・業務内容共に私の希望通りで、豊富な研修と社長の持っているビジョンに共感したことが志望の決め手となりました。

現在は、各授業で出される課題に追われながらも、楽しく日々を送っています。私は今までの学校生活を通して、知識・技術は勿論のこと、仲間の大切さ、どんなに大きい壁にぶち当たっても諦めずにやり抜く忍耐力と精神力を身に付けました。

私は会社員時代に学んだ「自ら機会(CHANCE)に飛び込み、挑戦(CHALLENGE)することで自らを変化・向上(CHANGE)させる」3Cを常に意識しながら、自分自身のやりたい事・出来る事を追求してきました。今後は残りの学校生活を一生懸命やり抜く事、そして卒業し新社会人として精一杯仕事に取り組み挑戦することで、不可能も可能にできると確信し、努力し続けていきたいと思えます。

専修学校等の部 優秀賞

学校というものにおける考え

青山製図専門学校 CAD設計製図科 二年

杉原 一宏

「この地上に大学ほど美しいものはめったにない」と、ジョン・メイスイールドはイギリスの大学への賛辞のなかで述べている。そしてこの彼の言葉は、今日、ここでもそのまま通用する。彼のこの言葉は、大学の塔や学園の芝生のことを言っているのではない。なぜならば、彼の大学賞賛の言葉は、次のような言葉だからである。「無知を憎む人々が知る事に努め、真理を知っている人が、他の人々の目を開かせようと努力する場所が大学である」

1963年6月10日、ジョン・F・ケネディはアメリカン大学の卒業演説『平和への戦略』の一部分で先のような事柄を述べた。

私は、幼少の頃からこの言葉を忘れた事がない。ただ、昔から英語を習っていた母が、彼の演説の英文を和訳し、壁に貼ってあっただけにすぎない。勿論その他にも沢山の和訳文が貼られていたが、今日まで覚えているのはその一文だけだ。それが私の心に響き、捕らえて離れない。私は決して頭がいいと言える人間ではない。小学校の時こそ成績優秀で通り、生徒会長まで務めた事もあるが、それからは勉強する意志など全くなく、下落の一途を辿っていた。そして大学受験も失

敗し、浪人が決まった時、私の人生においての一つの転機が訪れた。留学である。はつきりいつて明確な目的があった訳ではなかった。やりたい事も見つからず、浪人してまで行きたい大学がある訳でもなく、ただ外に飛び出したかっただけだった。そして留学先のシアトルで、私は今までの人生観が全く変わるほどの衝撃を受けたのである。

「この地上に大学ほど美しいものはめつたにない」何度この言葉を頭の中で繰り返したか分からない。短期大学ではあるが、そこは紛れもなく美しい場所、本気で知識を得ようとする人たちで溢れかえっていた。高校まではあるものの、私の記憶の中には「学校」というものは、つまらないものでしかなかった。毎日毎日同じ道を通り、目を盗んで弁当を食べたり、漫画を読んだり、たまに勉強したり。およそ美しさとは程遠いものだった。

が、しかしそこは違った。道行く人は知識を求め、教室の中で寝ている人など一人もいない。それぞれがそれぞれの目的を持ち、勉学に励み、言葉の壁、文化の壁を越えお互い切磋琢磨していく様を目の当たりにし、今までの自分の愚かさを思い知った。そんな中、私はとにかく遮二無二勉強をした。やりたい事が見つかった訳ではなかったが、自分一人遅れぬように必死で頑張っている友人達や、クラスメイト達に負けぬようにとにかく目の前にある事を一つ一つやり抜いた。そうしていく内に、今までつまらないと思っていた学校が段々と面白く感じるようになってきた。最初の頃、全て英語で行われる授業のため満足に理解できず、ついていけなかったものも段々と要所は掴めるようになり、何が分かり、何が

分からないのかも把握できるようになった。そうすると必然的に知識も欲するようになり、学校にいる時間がだんだんと長くなってくる。卒業したくないと思ったのはこれが初めてだった。

しかし、授業にも慣れてきてタイムマネージメントに余裕ができるようになった頃、あるクラスのエッセイで私は0点をとった。内容としては、ただ「ある本を読んでそのレポートを書きなさい」というものであった。私はすぐにプロフェッサーのオフィスに行き、理由を聞いた。すると彼は、ただ一言「あなたの意見はどこにあるのですか？」とだけ言った。私は自分なりの言葉で書いたつもりだったが、それはただ「くだと思う」とか「くだのではないか」とただの感想であり私個人としての考え、意見が何一つないのだ。そこからまた一つ勉学に対しての考えが変わった。ただ受動的に勉強するのではなく目的を持ち、意識を持ち、積極的に取り組むこと。思えば至極当たり前のことなのだが、それがど

れだけ難しいことなのか改めて思い知らされた。そして五年間の留学生活を経て、今、私は青山製図専門学校に通っている。やっと自分の勉強したい事が見つかり、設計技術者の知識を欲し、その分野のプロフェッショナルが揃う学び舎の門を叩いた。

勉学というものは意識のモチ方一つで、受動的にやるか、自ら率先してやるか、それだけで天地程の違いが出てしまう。「この地上で大学ほど美しいものはめつたにない」それはたった一人の行動で創れるものではなく、そこにいる全員の行動によって創られる。

今一度、一人一人が何故学校に通うのか、その意味を考え、知識を得られる事がどれだけ幸せなのかを自覚し、確固たる意志をもって勉学に取り組み、しっかりと自分の糧とする。そうすれば学力の低下が危惧されている日本にも「美しい場所」が増えるだろう。そして私自身もその「美しい場所」の創造の一翼を担えるよう、今まで自分が得た知識、経験を基に自覚ある行動をしていきたいと強く思う。

専修学校等の部 佳作

私の職業観

国際観光専門学校 国際ホテルデュアル学科 二年

平 石 美穂 子

幼い頃からの「ホテルウーマンになる」という夢を実現すべく、国際観光専門学校・国際ホテルデュアル学科の入学を決めました。

国際ホテルデュアル学科の「デュアルシステム」とは、学校での座学と並行して実際の企業で働きながら教育を受ける企業実習を行うことで、卒業に必要な単位を修得したと認める新しいシステムのことで、実習した分が単位の履修と認められることだけでなく、労働分の対価（給与）を得ることができ、ホテルで得た給与で学費を支払うことができるということが入学の決め手になりました。親に負担をかけたくなかったことと、自分の力で夢を実現したいという気持ちが強

かったからです。昼間は学校での学生生活、夜は実際のホテルでの勤務ができる「デュアルシステム」は頭と体で学べる最高の環境です。

学校で学んだことの中に疑問がうまれた場合、職場に行く現場で何年も経験をされている先輩方がいるので質問し即解決することができます。デュアル生として学生と社会人を両立させる生活は精神的にも肉体的にもハードですが、本当に充実した毎日を送っています。また、その大変な日々を乗り越え、二年間やり遂げたという自信は、就職の際にも大きな力となると思います。

私の研修先であるホテルのティールラウンジでは仕事時は着用で、私たち学生も実際に着物を着て勤務します。研修がスタートし、まずは自分一人できちんと着物が着られるようにならなければなりません。数回の着付け教室への参加や先輩方の指導のもと、自分で着られるようになるまでひたすら着る毎日でした。最初は出勤時間の二時間前に行って着替えていましたが、今では三十分で着られるようになりました。

社員の方向様に着物をしっかり着こなし身だしなみを整えること、一人の行いがそのラウンジの評価になり、ホテル全体の評価に繋がるのです。それを意識することにより、一社員という気持ちを持ち、自分に何ができるのかを考え、瞬時に対応することが大事だということを学びました。

ティールラウンジでの業務内容は、主にお出迎え・案内・注文を伺う・ご注文の物をお持ちする・お見送りです。この繰り返しのようにも見えますが、早くお客様のテーブルへご注

文の品を持って行くためにスタッフ全員で力を合わせて連携プレーで仕事を行うこと、決して一人ではできないし味わえない醍醐味がそこにあります。それこそが心のこもったおもてなしに直結していると思います。

職場の支配人に「五感を使い、どうしたらゲストに感動してもらえるかを常に考えておくことが大切だ。」と教わりました。グラスの中の氷がカラカラという音をたてたら、もう水が空になっている合図なので水を注ぎに行く時だと瞬時に判断できるということを学び、なるほどと感動したのを覚えています。喜んでもらえるのは当たり前ですが、満足を超えたゲストの感動をやりがいに、最高のおもてなしができるホテルウーマンになりたいと思います、日々努力しています。

入学してからこの一年半ほど、勉強に仕事に一生懸命な毎日だったように思います。学校を一步出たら社会人としての自分にならなければならず、分からない事はとことんまわりのスタッフに質問し、お客様を心からおもてなしすることに精一杯力を注ぎました。自分が提供したサービスがすぐその場で自分の評価につながる中で、学生だからという甘い気持ちは通用せず、一人の社会人として見られる中、時には葛藤もありましたが、二年間やり遂げた達成感は何ものにも代えられない喜びです。学校の先生方や友人やホテルのスタッフの方々へ感謝してもきれないほどです。

就職活動の時も、ホテルで働きながら努力している姿勢を就職面接担当者も評価してくださり、今まで勉強も仕事も一生懸命やってきて良かったと心から思いましたし、一生懸命やったことはちゃんと自分に返ってくるのだと感じました。

この経験を私のこれからの人生に大いに活かし、日々精進していく気持ちでいっばいです。元気に明るく笑顔をモットーに、プロ意識を持ち仕事に臨みます。

## 仕事とは

ホスピタリティーツーリズム専門学校 航空運輸学科 二年

黒 須 智 美

私にとって仕事とは何だろうか。ただ漠然としていた考えがインターンシップを通して明確なものになり、その答えが見出せたように思う。

旅行、ビジネス、帰省など人々がそれぞれの目的を持って訪れる場所、空港。そんな空港の顔であり、お客様の空の旅が安全で快適なものとなるようにサポートをするのがグラウンドスタッフである。限られた短い時間の中でお客様一人一人の状況に合わせたサービスを提供している。私は、そのグラウンドスタッフとして一ヶ月間、インターンシップをした。

数多くある仕事の中で私に与えられたのは、主にセキュリティエリア内での案内と、出発時刻間近になっても搭乗していないお客様を捜し、搭乗口へ誘導することだった。この仕事を始めてすぐ、思っていた以上にハードだと分かった。

汗をかきながら空港内を走り回ったり、時にはゴルフバックを持ってお客様と一緒に搭乗口まで走ったこともあった。しかし、それが辛いとは思わなかった。むしろその状況を楽しんでいたような気がする。それはおそらく、無事に搭乗口へ

辿り着いた時に、お客様からもらえる「ありがとう」という言葉のおかげだと思う。その一つの言葉をもらえることにやりがいを感じたのだ。

また、小さな子どもが転んでしまい、口の中を切ってしまっただことがあった。その時は、突然の出来事に慌ててしまい、落ち着いて対応することができなかった。このような場合にどう対処するのか、事前に確認をしていたら、素早く適切な対応ができたのではないかと反省した。様々な場面を想定しておくことで自分自身に余裕も生まれてくるのではないだろうか。そして、その時その時に合った適切な対応をするためには、多くの知識と経験が必要なのだと思う。

さらに、一ヶ月間、様々なお客様と接することで分かったことがある。サービスとは、一方的なものではなく、お客様の状況や気持ちを共有し、寄り添ってサポートをすることだということだ。お客様一人一人が求めていることはそれぞれ違うので、同じ対応を繰り返しているだけではサービスを提供しているとは言えないのではないかと感じた。求められているものを先読みしてアクションを起こし、要求に応えられることがサービスなのだと思う。

これらの経験を通して見えてきたものは、仕事は勉強であると同時に、楽しみながらやりがいを見つけ出すことで、さらに成長していけるものであるということだ。人の一生の中で仕事をする時間の割合はとて多い。ということは、仕事のやりがいを見出し、充実させることで人生そのものが潤うのではないかと思った。人はやりがいを感じるによって日々の生活に張りが出るからだ。私にとって仕事とは、成長

させてくれるものであり、人生を楽しむためのものなのだと気付いた。

私は間もなく社会人になる。これからの人生の大半を占める仕事が始まるのだ。仕事をするこの意義が明確になったことで、働くことが楽しみにもなった。まだ知らない苦労も多々あるだろう。挫折してしまいそうになることもあるだろう。しかし、そういった辛い経験からこそ学び、成長できることがたくさんあると思う。そしてその辛いことを乗り越えられた時、達成感や充実感、仕事に対するやりがいを感じられるのではないだろうか。

私は、これから会社に入るまでの学生生活の中でさらに語学を磨いたり、資格を取得したり、良いと言われているサービスを実際に受けて学び、これからの仕事に活かせるようにしていきたい。そして、仕事を通して人生を充実させたいと考えている。

## 私が社会に貢献できること

ホスピタリティツーリズム専門学校ツーリズム学科 二年

富岡愛梨

私が社会に貢献できること。それは「世界平和」です。とても大きなことを言って、笑われるかもしれませんが。しかし、私には必ずその手助けができると思っています。

私は来年四月から、とある旅行会社への就職が決まっています。旅行会社の仕事で、一般の方でもイメージしやすいも

のは、店舗にある旅行カウンターでの店頭営業、また修学旅行や会社の社員旅行などを手配する法人営業だと思っています。それぞれお客様の年齢層も違えば、性別、趣向なども様々です。でも根本にあるものは、お客様にご旅行をお勧めし、送り出すことだと思います。当たり前のことかもしれませんが、このことが既に世界平和へとつながる社会貢献なのです。

高校二年生の夏休みに、私は初めて海外へ出かけました。目的は、オーストラリア、シドニーにある私の高校と姉妹校提携をしている高校への語学留学でした。二週間という短い期間ではありましたが、ずっとホームステイをさせて頂いていました。そのホストファミリーは大変親切で、慣れない海外での生活でしたが、とても充実した毎日をご過ごすことができました。また出会ったオーストラリアの方々はとても温厚で、上手く英語を話せない私にも、気さくに話しかけてくれ、その二週間で大好きになりました。

日本に帰ってきてからも、一つ年下のホストブラザーとは連絡を取り合っています。お互いの国の文化や出来事、最近の流行などを情報交換したりすると、さらにお互いのことやお互いの国の理解が深まります。とてもよい刺激になりますし、自分の視野さえも広げることができるので、大変よいことだと思います。

今年の夏休みは、長野県大町市主催のツアープランニングコンテスト出場のため、五日間の視察をさせて頂きました。大町市については、学校の授業で少し勉強したため、名前といくつかの観光地は知っていました。しかし、市販のガイドブックにはあまり掲載されておらず、知識もほとんどないま

ま、出発の日を迎えてしまいました。

視察中は、市役所の方が町を案内してくれ、養豚場やりんご園、地元商店街を訪れました。地元の方とたくさんお話をさせて頂き、地元愛をたくさん感じる事ができました。また湖でボヤージュカヌー等のアクティビティを体験し、その中で緑の豊かさ、水の綺麗さをこの目で実際見る事ができ、とても感動しました。現地の方々の温かさや自然の豊かさに触れると、何故かその土地に愛着をもつようになります。私自身、すぐに大町が第二のふるさとかのように、大好きになりました。

このように、旅行に出かけることで、その土地を知ることができ、その土地の方とふれあうことで愛着が湧きます。これは、国内外関係なく、言えることだと思います。その土地を訪れることで、理解が深まります。その国を好きになることができたなら、少しでも世界は平和へと近づいていくのではないでしょう。

私はお客様に「あの国が好きだ」と思って頂くきっかけが出来るのだと、来春の就職を楽しみにしています。些細なことかもしれませんが、これこそが私が社会に貢献できることだと確信しています。